

児童文化を基軸とした生涯学習を推進 現代社会に「心の豊かさ」を取り戻す

◇ 基礎講座の継続で、会員は全国に

子どもの頃に慣れ親しんだ絵本を大人になってから再び手にしたとき、思わぬ発見をすることがある。大人になる過程ですっかり忘れてしまったことを思い出させてくれたり、子どもの視点で見る大人の社会にはっとさせられたりする。

そんな絵本や児童文学を題材として生涯学習を展開しているNPOがある。JR小樽駅から運河へ向かって下る道の中ほどにあるビルの四階のワ

ンフロアが、その「NPO法人絵本・児童文学研究センター」である。

三〇人ほどが座れる教室の周囲の壁は本で埋め尽くされているが、その一角に臨床心理学者の故河合隼雄氏のにこやかな笑顔のレリーフがかかっている。二〇年前の創立からまもないころ、活動の趣旨に共鳴して顧問に就任し、以来、年に二回のペースで小樽を訪れ、講演やセミナーを引き受けてくれたという。さらには、河合氏の人脈で谷川俊太郎氏、大江健三郎氏などの著名人も登壇している。

文・加藤知美

北海道の元気! NPO訪問

9 NPO法人 絵本・児童文学研究センター

活動の柱は「大人のための児童文化講座」で、基礎講座全五四回は理事長の工藤左千夫氏が組んだプログラムで、設立当初から枠組みは変わっていない。月二回ずつ受講し二年半かけて履修する。絵本・児童文学とはいえ、講座の本身は、哲学や歴史、発達心理学などの領域に及ぶ。独自のテキストが使われ、乳幼児からの成長過程と絵本のかかわり、グリムやアンデルセンの童話、日本の児童文学の歴史、テーマ別の作品紹介、ファンタジーとすすむ。大学院レベルの内容も含まれている。一講座は時間帯や曜日を変えて三回繰り返されるので、家庭や仕事の都合に合わせて受講できる。現在、講座を受講中の会員、または修了して正会員となった人は約一三〇〇人で、その大半が女性

だ。地域別では、六〇〇人余りを札幌と小樽の市民が占めるが、実に四七都道府県すべてに広がっている。

遠方の会員は毎回の講座をDVDで視聴してレポートを提出すること

で履修できる。この基礎講座を修了すると正会員になることができ、毎月一回開かれる正会員ゼミに参加できる。

こうした講座を始めたのは工藤理事長の生涯学習と児童文化の接点の模索への強い思いがきっかけだった。出版社に勤務する傍ら、児童文化に関連する学問領域を学んで専門性を深めた。頼まれると、子どもにとって本当にふさわしい絵本や児童文学書を選ぶための講義をしたが、もっと体系的、総合的な講座をやりたいと思い、カリキュラムを作ってみたら五〇回分の講座の構想が生まれた。センターの設立は一九八九年、三七歳の時であった。

◇ 盛況の独自事業、社会貢献で市の事業にも参画

児童文化講座の第一期生が修了式を迎えたころ、各界の著名人を招いての「文化セミナー」の企画



小樽駅から徒歩5分と交通の便もよい

が動き始めた。その基調講演を依頼したことから故河合隼雄氏との親交が始まった。当初四年に一回の開催だったが、現在は毎年十一月に開催され、その時代の課題がテーマとなり、定員約五〇〇名のホールが満席になる。

また、ファンタジー文学の優秀作品を公募する「児童文学ファンタジー大賞」を創設し、これまで一五回を数えている。後世に伝承できる児童文学作品の誕生を願っての事業だ。全国から力作が多数寄せられるが、審査は厳しく、第三回を最後に大賞は「該当なし」が続き、佳作、奨励賞の選考結果や選後評がセンター広報誌『ドーン』に掲載されている。

さらに、二〇〇一年からは、独自の資格制度として、子どもの年齢や家庭環境を考慮した良書選択のアドバイザー「児童図書相談士」の検定事業も実施している。



熱心に聞き入る講座受講者のみなさん
講師は工藤理事長

このほか、二〇〇三年からは、小樽市での社会貢献事業としてブックスタートを開始した。ブックスタートは、地域に生まれたすべの赤ちゃんを対象に、健康やかな成長を願って、〇歳児検診などの際に絵本を手渡す活動であ

り、一般的には市町村などの自治体によって実施される。小樽市の場合、絵本・児童文学研究センターが図書館や保健所とともに結成した小樽市ブックスタート協議会が、小樽南ロータリークラブの協力も得て事業を実施している。センターは年間二〇〇万円にのぼる費用を負担し、児童図書相談士の派遣もおこなっている。

◇ 安定した運営、少子高齢化で高まる事業の重要性

これらの多岐にわたる事業の展開は、工藤理事長のほか正職員スタッフ六名の手によりすすめられている。

講座の通信受講者向けのDVDダビング作業もすべてセンター内でおこなうなど、事務量は少なくないが、この人員で効率的に処理できているのは、徹底したIT化によるものだ。会員管理のために独自のシステムを導入するなど、これまでにITに投資した額は約二〇〇〇万円にのぼる。道外にバックアップ用のサーバーを持つなど、リスク管理もしっかり考えられている。

団体の内外への情報公開も行き届いている。事業報告や収支報告はもちろんのこと、人事や運営形態が明記された会報が発行されている。定款のほかにいくつもの細則が定められ、規則の妥妥た運営がなされていることも特徴的だ。

一九八九年の設立後しばらくは任意団体として活動し、二〇〇一年にNPO法人としての認証をうけているが、もともとは社団法人化を考えていたという。理事会・評議員会などの体制も整えたが、NPO法制定の動きがでてきたため、NPO

法人格を取得することとなった。

年間九〇〇〇万円あまりの財政規模の半分以上を会費収入でまかない、現在、補助金・助成金は一切ない。「安定した財政基盤をもつ

ことで活動を重層的に広げることができた」と工藤理事長は言う。会社員時代の事業運営の経験から経営感覚を磨いた。

生涯学習と児童文化の接点を模索する活動は、二〇年を経てもますます重要性を帯びてきている。少子高齢化がすすむ現在、子どもたちの心をいかにケアするかということとあわせて、余生を心豊かに過ごすための手がかりが求められているからだ。絵本・児童文学研究センターでは現在、「児童文化と生涯学習」学会の設立を準備している。児童図書相談士が学会の中核を担うと期待されている。

◆ NPO法人絵本・児童文学研究センター

所在地 小樽市色内1丁目15-13 大同ビル4F
TEL 0134-2710513
WEB <http://www.ehon-ej.com/>



教室の一角にある図書コーナー